

性差のコミュニケーション

中 村 平 治

男女の交流と対話は、円滑に転ぶときと、ぎくしゃくと軋むときがある。どちらの「とき」が好ましいかは問うまでもない。人生は黒色よりバラ色がいいに決まっている。本論は男女の対話が軋むとき、その原因を突き止め、円滑化へ転換するように、対策を講じるのが主たる任務である。

人間関係がぎくしゃくとする原因は、いろいろ想定されるが、性差、即ち男女の違いがその一端として挙げられよう。違っていることが全て軋みに繋がるわけではないが、一部が因果関係に預かることだけは確かである。

そこで本論では男女の不和の元凶となる違い（性差）とはどのようなものを分別することから始める。違いが明示されると、次にこれらをどう評価また批判するかの判定が待っている。更に次にこの判定を基に、改善のための対策が練られるようになる。

論考の手順については、次の1節で症例を添えながら明らかにしよう。

1 論点の性差と判定と対策

先ず、性差（男女の違い）についてであるが、これは身体部分的なものと気質的なものとに大別される。前者の例に、生殖器・筋力・胸部・皮下脂肪などが、後者の例に、愛情・感情・態度・生理などが挙げられよう。両者は必ずしも分明できないが、要するに、行き違いの原因にならないものと、なるものに分けられる。例えば、男女で乳房の違いがあるからといって、これが元で双方が激しく口論することはないはずである。ふくらみの違いはむしろ「ある」方が男女の関係はうまく行く。したがって、この種の症例は論点にしない。

本論で眼中に置くのは、争いに繋がる男女の違いである。例えば、抽象的な議論になるが、愛情の濃淡の違いが挙げられる。結婚式を境に女（妻）の男（夫）に対する愛は一般に「濃く」昇華するが、男の女に対する愛は「淡く」下降する、という違いが指摘できよう。もしこの傾向上の違いを認めると、即、両者争いの元凶に展開するであろう。妻からの「最近とんとご無沙汰になったわね、冷たくなったわ」という宣戦布告が発せられ、夫からの「仕事が忙しくてね」と防戦がしかれ、これを機に、火花が散り易くなる。犬も食わぬという夫婦喧嘩に展開する恐れが生じる。したがって、この種の違いは以下の論及に取り入れられる。

もう一つ、衝突に繋がる男女の違いに、生理に関するものが挙げられる。この現象は身体と心理の合の子みたいな存在で、論点の元凶になるのかどうか判然としないが、少なくとも、このことに

気づかないで接すると、とんだ藪蛇になる。私がそうであった。

私は25歳になるまで女性と接したこともなければ、知り合いもいなかった。姉も妹もいなかった。女性に関しては完全白紙の無学であった。お見合いで交際をするに及んで少しずつ知識は増えてきたものの、知らないことから起こる失敗は数限りなくあった。その中の大きな失敗の一つに、女特有の生理があった。

私は女に定期的に訪ねてくる来客があり、その接待で一時的にヒステリックに豹変することを知識として把握していなかった。このため、つまりこの種の生理が女にだけ存在することを知らなかった。それで、その期間、私の平常心の働きかけがことごとく跳ね返され、それが発火点となり、言い争いへと展開していった。今にして思えば、たわいない原因であった。

上に挙げた2つの例、即ち、男の女に対する愛の希薄化と女特有の定期的な錯乱状態は、どちらかと言うと、それぞれに先天的に備わっている違いであるが、次に後天的に工作される違いも見逃せないので、一言触れておこう。

それは現実的な生々しい問題であるが、性差別、即ち同一労働に対して男女間で賃金とか機会均等の格差が人為的に工作されたり、男尊女卑や蔑視が不当に行使されたりするといった違いである。これらの違いは確実に労使間の紛争の元凶になる。見逃せないが、しかし本論では取り上げない。私より有能な feminist (女権拡張論者) にバトンを渡したい。

ここで問題にするのは、もっと本質的な「愛情」とか「感情」といったものに関する男女の違いで、かつ、それらが火花の原因になるものについてである。目指す対象は、2節以下の小見出しで示す通りである。

論点の違いが卓上に載せられると、次の作業は、それらの善・悪の判定になる。上の例で言うと、愛の希薄化また心の乱れは、好ましいことなのか、好ましくないことなのかの査定である。なぜなら、この位置づけは、違いを緩和ないし地均しする基点になるからである。対策の基本線として、双方の「歩み寄り」を今、念頭に置いているが、どちらが、どちらに寄っていくのかが、これで決められるからである。愛の希薄化の場合、一応、好ましくない査定されるので、男の方が濃密化に向かうべく歩み寄らねばならないという対策が立てられることになる。

一方、定期的なヒステリック状態は、男にとって好ましくない現象でも、人為的にどうしようもない、通過するのを見守るしかない病気であるから、あきらめるしかないので、男の方が女の方に歩み寄り、寛大になるのが得策である、というふう決められる。男女、どちらがどちらに譲歩するかは、当然、簡単には決められない問題であり、またこのことに平行して、関わる対策も複雑なものになると予測される、細かな議論は以下の言及で展開する。

2 丁寧さ

男女の気質また態度の違いを示す項目として、先ず「丁寧さ」を挙げたい。言動に寄せる丁寧さは、一般に、女に顕著に認められ、男に希薄であると言えよう。女は身体的に華奢で、なよなよと

しており、男は頑強でたくましいと言えよう。このことと連動して、女は気質的に上品で、洗練されており、男は粗野で、荒削りである。

この分け方には、もちろん、例外があり、「蚤の夫婦」とか「肝っ玉母ちゃん」の場合、逆の位置づけになる。それはそれとして、おおよそ、女は丁寧で、男はぞんざいであると違いを指摘してよいであろう。

この気質上の違いは、要請の言葉化（話し方）に具現化しやすい。女の話し方は、下から上を見上げるような「懇願口調」に、男のそれは見下ろすような「命令口調」に展開し易い。それぞれに該当する例を挙げよう。

——女の話し方——

「行っていただけないかしら」
「お出てください」
「10円拝借できないでしょうか」
「待ってください」
「召し上がってください」

——男の話し方——

「行ってくれ」
「来いよ」
「10円貸してくれ」
「待て」
「食べるよ」

上の要請文は、左が丁寧で、右がぞんざいで、その分だけ違いがあると言えよう。言葉化の面でも、気質の面でもそれだけの性差が男女の間に存在すると認めてよい。「丁寧さ」が女にあって、男にない、という違いが存在するのである。

この違いを認めることは、議論の起点になる。違いがあるから、男女の交流が、対話が円滑に転ばなくなるというふうにつながっていくからである。

例えば、男が友人の男に「早く、食べてしまいな」と命令しても、別に悪感情を与えないであろう。砕けた押しつけであるだけに、むしろ、親しみがあると好感さえ与えるかもしれない。しかし男が知り合いの女に同じ言い方をするとどうなるであろう。女が深窓の令嬢であれば、なんて乱暴で、動物的な呼びかけでしょうと気分が悪くなり、その場で卒倒するかもしれない。

逆に、女が友人の女に「早めに、お召し上がりになってください」と懇願しても、別に異状な呼びかけだとは思われないであろう。しかし、女が知り合いの男に同じ呼びかけをすると、どうなるであろう。ぞんざいな命令表現になじんでいる男であれば、冷水を頭から浴びせかけられたも同然の気分になるかもしれない。

いずれの場合も、我が身にそぐわない言葉化であり、不調和現象を誘発する。不調和から、つまり違いから、男女の不和・衝突・争いまでは、眼と鼻の先である。

話し方の違いから、不和が生じるのであれば、調和に好転させるにはどうしたらいいのか、に議論が移るが、後回しにして、もう少し、違いの例を加えよう。それは、女の丁寧さと男のぞんざいさの延長線上に、女特有の「婉曲（間接）」と男特有の「直言（直接）」表現があるということである。この違いは男女間で意図が通じなくなるという恐れが生じるので要注意である。次の例がそう

である。状況は、部屋が蒸し暑いので、窓の傍に居る誰かに開窓を要請する呼びかけとする。言葉化は違っているが、意図は同じである。次の性別は断るまでもない。

「あもう、このお部屋、蒸し暑いですわね」

「おーい、そこの窓、開けてくれないか」

ここでのポイントは、女から男への遠回しの呼びかけが、同性に対する場合と同程度に、通じるかどうかである。普通の常識のある男であれば、開窓の婉曲表現であることを直ぐに見抜くであろうが、純朴な、女の丁寧さと遠慮深い婉曲に馴染んでいない男であれば、察することができず、上の呼びかけに対して「ええ、暑いですね」と相槌をうつだけにとどめるかもしれない。そうすると、女の呼びかけがご破算になってしまう。そこに対話の溝ができる。女にしてみれば、男に誤解れたことになり、交流の発火点になる。

類する誤解はよくあることである。他の例であるが、恋人同士がドライブを楽しんでいた。彼氏は運転がうまく、彼女も軽快な走行にルンルン気分であった。彼女はふと喉の渇きを覚えた。潤したくなった。冷たいジュースでも飲みたくなった。彼氏に停車を要請することにした。彼女は「車、止めて」と呼びかけようと思ったが、しかし、この言い方では直接的で、彼氏のせっかくの気分を損ねると心配し、他の言葉化に切り替えようと思ひ直し、次の婉曲表現を試みた。

「あなた、渴いてませんか？」

彼女はこの表現によって、それとなく「車、止めて」を暗示したつもりであったが意が通じなかった。

彼女は自分の意図が通じないので、第2段の呼びかけとして「近くに、レストラン見かけないわね」と誘ってみた。「レストランに連れて行ってよ」の遠回し表現のつもりであった。しかし、この丁寧な間接表現も通じなかった。彼は「いいえ、あるにはあるんですが、見えないだけなんですよ」と、とんちんかんな返答をした。

彼女はこの返答で堪忍袋の緒が切れ、喉の渇きも吹き飛んでしまったという。結果的に、この返答が発火点になり、つまり彼氏の鈍感さが鼻持ちならないものになり、これでは生活を共有できないという気持ちになり、離れてしまったという。(Allan & Barbara)

もう一例、個人的な体験であるが、私(男)が直接的な、妻(女)が婉曲的な表現を選んだケースを引き合いにだそう。それは、息子の嫁から、ここ数年送られてくるお中元の贈答品の断り状についてである。中身が毎年同じ「油のセット」で、我が家で使用することのない品物であるため、嫁にしてみれば、善意のものでも、こちらでは有難迷惑であるため、なんとか、この慣行をストップさせようとしたことに端を発している。断り状の文面について男と女の間に意見の対立があった。男が直言の方がさっぱりしていると主張したのに対して、女は、気持ちが同じでも、相手の気分を

害するので、示唆的にやめさせる方が良いと主張したからである。

結果的に、双方で文面をハガキにしたため、どちらか良い方を採択しようということになった。次の断り状のどちらがどちらのものであるかは断るまでもない。

- (A) 「前略。贈り物、有り難く頂戴します。しかし、私ども料理で油を使用することはありませんので、次回より別の品を送って下さい。敬具」
- (B) 「暑中お見舞い申し上げます。本日はまた結構なお品を頂き、お礼のしようもありません。ところで、これまでに頂いた油が使い切れず、だいたい残っています。
- 右、お礼まで。暑い日が当分続きそうです。どうかご自愛下さい。
かしこ」

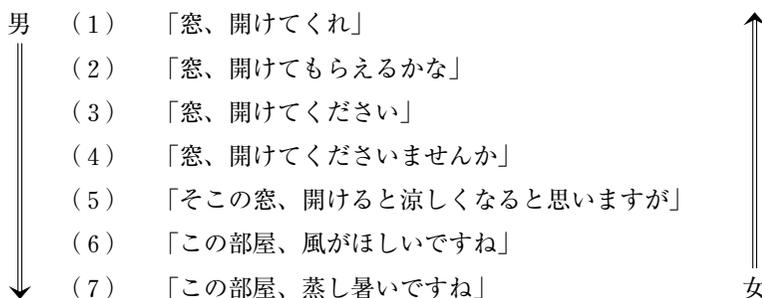
女房が(A)の「別の品を」のくだりで破顔一笑したことで、自動的に採択が決まった。でも、私の頭の中では、女特有の暗示的な「使い切れずに」という書き方が「送るな」になりうるかどうか不安である。(B)の断り状が功を奏するかどうかは、来年度のお盆を待つしかない。

「丁寧さ」を巡る男女の違いを示す事例の紹介は以上で切り上げるとして、次に、違いが引き金となる衝突・不和などの緩和ないしは鎮火法を考えてみよう。

衝突を回避する基本的な対策は、違いを無くす、つまり地均しをするということである。互いに歩み寄りをすると言っていいかもしれない。男が女に、女が男に、言動の点で、譲歩しあい、近づくのである。互いの融和は、もちろん、どちらかが全面的に譲歩し、相手側に接近することも考えられよう。要は、うまく合体し、調和を保つことである。

調和のための歩み寄りの具現化を段階的な例文を並べることによって次に示そう。

(1)が男特有の「ぞんざいな直言」だとすると、(7)は女特有の「丁寧な婉曲」表現だと位置づけてよいであろう。(1)が女にとって、乱暴で気分を損ねる呼びかけであれば、男は(7)の方向へ階段を下りれば、つまりより丁寧になるように言い改めれば、そして(7)が男にとって、回りくどくて意が通じないようであれば、(1)の方向へ上昇して行けば、つまり乱暴でも直言になるように言い改めれば、相手の誤解・不和が減じようというものである。



実は、英語にもぞんざいな言い方から丁寧な言い方への階段を下りる表現があるので、以下に紹介しよう (C. Ruhl)。

Open the window.
Will you open the window?
Could you open the window?
May I ask you to open the window?
The window should be opened.
It's hot in here.

上の見方が妥当だとすると、次のように対策が講じられよう。男が男に呼びかけるときは、ぞんざいな (1) でも親近感があるので好ましいが、女に呼びかけるときは、丁寧よりの (3) が好ましい選択に、一方、女が女に呼びかけるときは、婉曲な (7) が丁寧であるので好ましいが、男に対しては、直言でぞんざいよりの (5) が望ましい選択になると、まとめられるであろう。

「丁寧さ」と「ぞんざいさ」を並べてみると、前者の言動の方が断然優位であり、好ましいと評価され、全面的にこの方向へ向かうべきだと主張されるかもしれないが、しかし、後者の態度も、親近さを感じさせるという点で、捨て難いということを付記しておきたい。

3 感 情

人間は、男女に関係なく、感情に走りやすい面がある。平常心でいるときは、冷静で言動の点でも落ち着いているが、この状態が崩れると、平衡感覚を失い、疾走し、度が過ぎると、精神科でいうところの「躁病」に陥る。精神が異状をきたし、喜怒哀楽が激しくなり、収支がつかなくなる。病気と診断される場合は別扱いにすると、感情の多少の「揺れ」は人間誰しも身に覚えがあるものである。

誰しもといっても、感情的に陥り易いのは、どちらかと言うと、女の方であろう。言動の具現化に際して、冷静さまた理性を失い、放逸に流れやすいのは、男より女の方であろう。これにも例外はいくらでも挙げられるが、概して、肯定してよい傾向である。

女の言葉化は、感情の高低と平行して、次の特性を帯びやすいと、一応、観察してよいであろう。

——女の特性——

主観的
虚構
最上級

——男の特性——

客観的
事実
原級

飛躍	ありのまま
高いピッチ	低いピッチ
尻上がり	尻下がり
感嘆文	平常文
心 (Heart)	頭 (mind)
社交 (rapport)	伝達 (report)
情緒	理知

上のそれぞれの特性は対照的であり、この点で違いが認められるが、しかし、だからどちらかが表現として、より優れているとか劣っているとかいった判定とは繋がらないので念を押しておきたい。どちらの特性も、病気の場合を除けば、それなりに評価されるのである。上の感情を巡る言葉化として、次の例が挙げられるが、優劣は簡単には決められない。

—女の言い方—

「なんて素敵な色合いなんでしょう」

「その映画、感激したわ」

「この味付け、最高よ」

—男の言い方—

「いい色合いだ」

「その映画、良かったよ」

「この味付け、いいよ」

表現そのものに優劣がないとなると、この点で違いがないということになるので、論点の衝突、即ち火花を誘発しないということで、問題外にしてよい。ただ、どちらかの陣営に加担し、援護すると、例えば、感嘆文は大袈裟過ぎるとか、平常文は過少評価であるといった主張をすると、違いが表沙汰になるので、問題になる。

ここではもっと大きな、感情を巡る、男女の違いを問題にしよう。次の言葉化は女独特の言いがかりとして特筆に値するであろう。男の耳には、女に起こりがちな短兵急でヒステリックな捨て台詞と聞こえよう。女にしてみれば、日常的によく生起しがちな心の蟬りにしか過ぎなくても、男にしてみれば、ナイフを喉元に突きつけられたも同然の抗議になるであろう。次の言い方をされると、短気な男は、即刻立ち上がり、「なにをぬかす、この尼！」と一喝するかもしれない。

「仕事と私、どっちが大切なの!？」

「私のこと、どうなってもいいの？」

「あなたは、私のこと、これっぽっちも愛してなんかいないんだわ」

「私のこと、愛してるの、嫌いなのか？」

上の発話は、事実の伝達を蔑ろにした感情まるだしの罵声そのものである。これらが聞くに耐えない、度を越した表現であることはいうまでもない。女独特の all or nothing (一刀両断) の言い方であり、これが飛躍した極論であることもいうまでもない。断るまでもなく、事実から大きく離れた表現化である。この種の「わめき散らし」を男が聞き入れ難いと思うのは、言っていることが事実また論理からそれているからである。森羅万象は、女が好んで明言するほど単純には割り切れるものではない。これが現実である。現実に反したことを叫び散らすから、男は反感を覚え、反撃、攻撃にでるのである。そこで女と男の、自分の言い分を張る戦争が勃発する。

類する女独特の感情表現の例を加えよう。J. Gray からの拝借であるが、次の言葉化も「欲求不満 (frustration)」の反映であり、男の気持ちを逆なでするといふ。ここで言うところの宣戦布告に相当する感情表現である。

I feel like you never listen.

上の言い掛かりが男の頭にカチンとくるのは、男が信奉する factual information から大きく離れているからである。男にしてみれば、自分の言動を不当に批判されたという気持ちになり、事実の修正をしたくなる。この反発心が売り言葉に、買い言葉を男に促すのだと考えられる。

次の言葉化も、男にしてみれば、事実に大きく離れる感情表現、つまり聞き手の感情を害する罵倒だと言えよう。受けて立つ男にとって、反発心を掻き立てる言い掛かりの表現である。VS の左側を「売り言葉」と見ると、右側は「買い言葉」になる。

"Everyone ignores me." VS "I'm sure some people notice you."

"The house is always a mess." VS "It's not always a mess."

"You don't love me anymore." VS "Of course I do."

"Nothing is working." VS "Are you saying it is my fault?"

上の言葉に寄る応酬から男女の熱い口喧嘩が始まるのであるが、次にこの火花を鎮火する方策を提言しよう。基本的には、ここの場合も男女の「歩み寄り」が望まれる。つまり、女が感情の高振りを押さえ、かつ言葉を緩和し、一方、男は半分耳栓をし、立腹しないように心がけたらいい。

しかし、この妥協案は現実に即応しないようである。なぜなら、女から上に挙げた感情表現を剥奪するのは望めないことだからである。過度の感情を女に控えよと言うのは、「欲求不満」を表明するなど抗議するのと等しいことである。そして、この不満は女独特の「更年期障害」と結託している。

こういった現実を勘案すると、男は是認するしかない。女の感情表現を黙認するしか、つまり台風が通り過ぎるのを待つしかない。女からの「売り言葉」を男は「買わない」ようにすればいいのである。

では、どのようにして待つのかに問題が移るが、具体的な方策は、女からの売り言葉を額面通りに聞き入れないことであり、事実に沿った対応をしないことである。

例えば、「私のこと、これっぽちも愛してなんかいないんだわ」と目の玉を剥いて攻撃されても、「そんなことないよ」などと反撃しないことである。目をつむり、頭を上下に振り、女の不満に同情の素振りを見せ、しばらく黙認したあと、静かに、「ごめんよ」白旗を挙げるのである。この解決法は J. Gray の提言、即ち、女の不満発言に対しては、“That’s not true.”ではなく、“Come here, let me give you a hug.”が有効であるというのと重なる。

この回避的な応答は“You don’t love me anymore.”が内実的に次の訴えをしているのだと解釈し直すと、その有効性が肯定しやすくなるであろう。

“Today I am feeling as though you don’t love me. I am afraid I have pushed you away. I know you really do love me, you do so much for me. Today I am just feeling a little insecure. Would you reassure me of your love and tell me those three magic words, I love you. When you do that it feels so good.

4 愛情

こと「愛情 (love)」の誠実さと持続性に関しては、女に分がある。女は男に対していったん愛を固定させると、墓場まで持続させるが、男の女に対する愛は、頼りなく、断続的で消えがちである。

愛の固定、つまり芽生えと成就までは男の方が強引で濃いかもしれない、しかし、結婚式という峠を越すと、逆転する。女の男に対する愛は、初期の段階では、淡々としていて、薄いかもしれない、しかし、いったん定まると、次第に火力が勢い付き、永続的に燃え盛るようになる。一方、男の女に対する愛は峠まで上り詰めると、徐々に火力が衰え、消滅しがちになる。愛に関して、女は永続的で、男は断続的である。これには、もちろん、あまたの反例が並べられることは言うまでもない。例外は例外として、一応、次の男女の言い分の違いが指摘できよう。女の言い方の背後には愛の永続性が控えているが、男の無言また反論の背景には愛の点滅現象が覗かれよう。

—女の捨て台詞—

「あなたは私のこと、もう愛してなんかいないんだわ」

「独身のときは、よくレストランに連れて行ってくださったが、最近は、とんとお見限

りだわ」

——男の対応——

「お前への愛のエネルギーは式までに使い果たしたよ」

「釣った魚には、餌はいらんと言うじゃないか」

愛の濃淡、有無、強弱、密疎に関して、男女の間に違いが存在することが承認されると、次に、両者が交流するとき、どのような様相を呈するに至るかという問題が起きてこよう。愛が一方は濃く、一方は淡いだけに、戦わせると、真っ正面からぶつかることになり、火花が飛び散ることが火を見るより明らかになる。

そこで大激論の火を弱めるには、どういった対策が講じられるのが模索される。

本件の場合も、歩み寄りが一応望まれよう。つまり妻（女）が夫（男）に10割でなく5割程度の愛を求めるようにし、一方、夫は妻に1割でなく5割程度の愛を注ぐように努力したら、一応平衡が保たれ、喧嘩には至らないであろう。

しかし、この場合、そういった中途半端な妥協案より、夫の方が全面的に譲歩する方がすっきりすると私は思う。つまり、夫の方が10割の愛を、結婚式の後も、持続させるように努めるのである。妻が10割の愛を永続させているのが正当であるから、この方に夫が歩調を合わせるように心掛けるのである。夫が「持続」を「永続」に切り替えるようにすると、対等になり、延焼が下火になるであろう。

夫にしてみれば、浮気心を差し止められるのは、本能に待ったがかけられるのに等しいことであるし、耐え難いであろうが、そこは我慢のしどころである。脇目をするのが全面的に悪いと観念すべきである。

夫（男）に愛の充実を迫るのは正論であるとしても、一方では、過酷な要請だと同情される面がないでもない。社会的に、女は愛を永続させやすいが、男はそうではないように仕組みられているからである。つまり、女は家庭の中で異性と交わることもなく、いわば無風状態におかれるため、夫への愛を純粋培養することができるが、夫は家の外に置かれ、異性との交渉もあるということで、いわばお膳立てが多くなるため、妻への愛が自然に疎遠になりやすいのである。

夫に、他の女性との love affair（情事）を完全撤退してもらうには並々ならぬ覚悟が要るであろうが、妻との鎮火を望のであれば、やむを得ない苦行である。男に「断続」への反省をしかと求める次第である。

実際的に、夫に妻に対する愛が断たれ消えかかっているようであれば、満たすように努力すれば、済むことである。そこで愛が充足するにはどのような手立てが考案されるのかということになるが、これは単純に不足を埋め合わせたらいい。

この対策は難しく考えることはない。「愛していない」のが女にとって不満であれば、これを否定し、肯定すれば簡単に済むことである。女から「ない」と詰め寄られたら、いや「ある」よと打

ち消し、「愛しているよ」と肯定すればいいのである。このとき、「ない」のに「ある」というのは、不誠実で、嘘の始まりだから好ましくないと、待ったがかけられるかもしれない。しかし、一方では「嘘も方便」というのではないか。要は、男の「愛しているよ」という台詞が女にどれほど信用してもらえるか、である。真実のほどは問題外である。最重要なのは、女に「愛されている」と思わせ、安心させることである。

古女房に、いまさら「愛しているよ」などと、恥ずかしくて、口が裂けても、言えないと、開き直る御仁がいるとすれば、私は反省を促したい。恥ずかしいから言えないなんて、理由にならない、それくらいの努力を惜しむようであれば、夫婦生活を送る資格はないと、声を大にして発破をかけたい。聞くところによると、英語国民は夫が妻に気安く、頻繁に“I love you.”と声をかけるといふ。彼らにできて、日本人の夫にできないわけではない。要は、自己改造の意欲がどれだけあるのか、ということである。

愛の直接的な呼びかけが、どうしても、ためられるようであれば、これに相当する他の表現に頼ってもいい。「愛しているよ」だけが愛の存在証明であるとは限らない。「愛」を根元に有する表現化は他にいくらでも想定される。例えば、相手を褒めたり、称えたり、敬ったりするのも、愛の証明になるであろう。

「今晚のサラダ、さっぱりしていて、おいしかった」

「へえ、うまいこと言って、追い越したな、お前、頭いいんだナア」

「なに、太郎が成績優秀だって！ お前の家系は秀才なんだな」

上記の表現は「愛しているよ」に相当するほど、愛が「ある」ことの表現化につながる。愛の存在感は、その他、日常的な問いかけ、例えば「昨日、風邪気味だといっていたが、今朝はどうか」とか「日曜の草むしりは俺がするから、お前は休んでいる」といった思いやりを示すことによって、女にしてみれば「自分は旦那に愛されている」と感じられるのである。

愛の存在は、言葉によってだけでなく、行動によっても証明されるので、活用が望まれる。例えば、奥さんの誕生日とか祝日に少し豪華な贈り物をプレゼントしたり、記念日に一流ホテルで食事をしたりすることによっても、「自分は愛されている」と思わせるであろう。

言・動による愛の示し方は、初めは、空虚なものかもしれないが、慣習化するにしたがって、実質的なものに変容していくから不思議である。初めは「なく」ても、後で「ある」ようになるものである。

愛は、夫婦の共同生活において、双方共に持ち合わせておくべき性質のものである。妻の方にだけあって、夫の方に欠けているのは変則である。対等に持ち合わせるためにも、夫は愛の証明に奮闘すべきである。

5 共 感

男女の円滑な対話は、両者の対等のヤリトリによって成立する。分量的にどちらかに傾き始めると、平衡感覚を失い、不平等を増長し、摩擦が起きやすくなる。この見解は、男女は平等であるという理想論に基づいている。どちらかが一方的に喋りまくるようになると、不穏な空気が流れ始める。かといって、どちらも無言のままでも、息詰まる。円滑な対話は、お互いに押すときは押し、引くときは引くのが自然な流れである。

この対等なヤリトリを促進するのが、ここにいう「共有感覚」で、相手が「あ」といえば、「うん」で応じるのである。こうして呼吸が合えば、滑らかに対話は転んでいく。

「共感」ということで男女を比べて見ると、情況次第であるが、女に濃く認められ、男は淡泊になりがちである。例えば、結婚暦も数十年すると、妻の方が一方的に喋り、夫の方は黙りこくっていることが多くなりやすい。妻は悩み事を共に味わおうと建設的に取り組むが、夫は寡黙になり、回避する傾向にある。

夫婦の一方的な「妻が喋り、夫が黙る」という対話の例を次に挙げてみよう。文字通り共感に片寄りのある不均衡なヤリトリである。男女の違いは自明である。

妻：「会社で、何か面白くないことでも、あったんですか」

夫：「……………」

「なんでもないんだ」

妻：「なんでもない事はないでしょう。お顔、やつれていらっしゃいますよ」

夫：「……………」

「なんでもないんだ」

妻：「本当に、何でもないんですか」

夫：「うるさいな」

妻：「お話になったら、気がラクになるかもしれませんよ」

夫：「……………」

妻：「あなた!？」

夫：「放っといてくれ」

考え事や悩み事を妻と共有しようとしない夫の存在は、普遍性があり、米国にも数多く認められるようで、社会問題になっているという。次の例は J. Gray からの拝借である。夫婦が対話を共有しないのは、愛の消滅と平行しているのであろうが、男に自意識が強く、独立独歩の気質が濃厚であることにもよるであろう。悩み事を男は一人で考え抜こうとする習性にあるのに対して、女は手を取りあって、一緒に解き明かそうとする習性の違いがあり、これが夫独特の「なんでもないよ (It's nothing)」を後押ししているのだと考えられる。

wife: Is there Something wrong?
husband: No.
w: I know something bothering you, what is it?
h: It's nothing.
w: It's not nothing. Something is bothering you. What are you feeling?
h: Look, I'm fine. Now leave me alone!
w: How can you treat me like this? You never talk to me anymore.
How am I supposed to know what you are feeling? You don't
love me. I feel so rejected by you.

女の共有志向と男の自立志向に関連して、伊東明氏は次のように捕らえているが、後押しになるであろう。

——女の志向性——

「親しい人に悩みを打ち明けながら考えをまとめる」
「悩み事を心の中に沈殿させない」
「男性が沈黙考するのとは正反対」
「一緒に解決策を考えていきたい」

——男の志向性——

「自分の心の中だけでじっくり考える」
「理性をフル回転し、論理立てる」
「自分の部屋に閉じ込めり、内側からカギをロックしてしまう」
「悩みは女に見せないのが男らしさである」

要するに、上の対話において、女が問題を共有することによって援助の手をさしのべようとするのに対して、男は余計なお世話だと戸を閉ざしてしまうわけであるが、この押し問答はすでに、口論に突入している。そこでこの場合も、口火を未然に防ぐにはどういった方策が有効かの議論に移る。

口火を防ぐには、ひとまず、双方の「言い分」に耳を貸す必要があろう。男にとって悩み事と言えば、おおよそ、職場関係のものが中心になろう。こういった悩み事は背景を知らぬ女に話しても無駄だという先入観が走るのであろう。戦争のことは、戦場で現に戦っているものでないと分からないものだ。だから、男は女に対して寡黙になり、自分の「穴」に閉じ込めり、一人きりで考え、処理しようとするのである。

一方、女は、男からの干渉不要論に対して、異を唱える。悩みは、家庭のことであれ、職場でのことであれ、共有し、共感するのが妥当な解決に至るし、意見を互いに出し合う方が愛の育みにも寄与するという風に思うのである。妻にしてみれば、夫とは何もかも共有し一体化しないと安心感が得られないのである。

ここで男の「孤軍奮闘」志向と女の「分かち合い」志向の違い・葛藤が明確に展開するが、この別々の道はどうしたら一本化できるであろうか。和解に至るには、何事も自己反省が望まれる。

妻が共有感を持ちたいと申し出るのであれば、夫は耳を塞がないで、たとえ無駄であると分かっている、傾聴に努めるのである。この努力は事の功利性とは無関係であると思えば、気が楽になる。悩み事の解明にはまったく役立たなくても、別の利益がもたらされる。それは、内容如何に関わらず、夫と妻が対話を持つこと事態が和合に繋がるからである。対話といえ、男は実利的な情報のみを頭に置きがちであるが、それは間違った信念である。何でもいから、無益な話題でも、話し合うこと事態に意義があるのだ。この意義は日常なにげなく交わされる挨拶を思い浮かべると理解しやすいであろう。

例えば、買い入れの会計がどうしても合わないで、四苦八苦しているときなど絶好のチャンスである。原因が数字そのものでなく、何かの見落としによることが判明していても、妻を呼び寄せ「お前、ソロバン1級と言っていたな、俺が読み上げるから、合計してくれないか」と応援をお願いするのである。そこに男と女の共同作業が始まり、そこはかとなきほのほとした連帯感が漂う。合計の数字が更にもっと外れていても、「万歳！これで合った、よかった！」と歓声を上げるのである。そうすると、妻は明るくニコニコし、「ビールで、乾杯といきましょう」と調子にのってくれる。そこがポイントである。このとき、もし夫が一人きりで計算を繰り返し、妻の応援を求めなかったら、妻との間に氷の溝を増長させることになったであろうと思われる。合計の整合性が妻の応援を受けるにしろ、受けないにしろ、どちらも成立しないのであれば、冷戦で終結するより、酒の乾杯で閉じる方がどれだけ賢いやり方かしのれない。同じ阿呆なら、踊らにゃ損・損である。

夫が、こうして、協力を求めてくるのをいいことに、妻は調子に乗ってはいけぬ。夫が援助を申し出るのを当然視してはならない。男には孤軍奮闘の癖があることを常に頭の片隅に入れておき、夫からの申し出は希有のことだと、ブレーキを心掛けておくようにする。つまり女の方からむやみやたらに、手を差し伸べないように自粛しておく。夫が「放つといってくれ」と言い張るようであれば、これには率直に従うように謙虚になる。夫が半分折れて、支援を求めないのであれば、妻も半分折れて、事の介入を控えるようにするのである。

もう一例、今度は、妻側の悩み事であるが、これに対して、夫は無関心を装いがちであるが、この態度も改めるように努める。夫は家庭内の出来事、例えば子供の躾とか教育の問題や隣近所とのいざこざなどを、妻に押しつけて、自分はいい顔だけをし、解決の糸口をほぐそうとしないが、これを改め、共有解答を提言するのである。妻と一緒に家の諸問題をああでもない、こうでもないかと相談するのである。夫にしてみれば、これは一種の介入かもしれないが、妻にしてみれば、渡りに船の提案になるのである。この場合も、夫の提案は空虚なものかもしれないが、相談し合うこと事

態が有意義なのである。

この種の介入はこれまでは1割でしかなかったが、これからは割合を5に引き上げるのである。これが夫婦和合への追い風になるというわけである。

話題が協道に少しそれるが、夫の孤立化と妻の干渉癖は、男の「一極集中型」と女の「同時進行型」と関連し合っている。

つまり、男は仕事とか趣味にいったん没頭すると、そのことに全神経を集中させ、まっしぐらに深化していく傾向に、一方、女は多情で、多くの事柄を同時に進行させていこうとする傾向にある。男は一時に一つのことしか成し遂げられないが、女はむしろ多くの事柄を手中に納めていないと不安に陥るようである。

男は何かに打ち込んでいるとき、脇目も振れずの心理状態にあるので、他者から話しかけられても、馬耳東風で、聞き流される恐れがある。このとき妻から、夫は私のことなど欠片も眼中にないと反感を買いやすい。夫が自分のことだけに熱中しているので、妻から「仕事と私は、どっちが大切な？」と二者択一を迫られるのである。女が二つのことを同時に手玉にとることは何でもない常識的な行為であるが、男はどちらか一方しかできないのである。男は一刀使いを、女は二刀使いをする習性にあると言えようか。

この違いを伊東明氏は、「ワンモードの男」と「マルチモードの女」と特徴づけている。

これらの指向性も、互いに対照的であるので、交流に際して、火花が散り易いが、歩み寄ることによって、つまり、夫は仕事と同時に家庭のことも考えるようにし、妻は男が集中型であることに理解を示すように、一方、妻は女の丸抱え型を男に押しつけないように、努めると、和合が期待できるであろう。

6 魅 惑

ここで言う男女の違いとは、異性に引きつけられる側面についてである。相手のどういった点に魅惑を感じるかである。男が女のどこに見惚れ、女が男のどこに見惚れるかは、自ずから、異なっている。本節では魅惑の相違点を明らかにし、そこから生じる葛藤を位置づけ、解決の糸口を提言する。

男女は、交友に当たり、つまり相手に恋心を感じるに際して、目の付け所が違う。男は、まず、女の「美しさ」「可愛さ」にそこはかとなく引き寄せられるし、女は、男のそういった外見の良さも含めて、内面から立ち上る印象の良さに圧倒されるようである。概して、男は容姿端正な女を嫁取りの第一条件に、女は質実剛健な男を所望すると言っていいであろう。

目のやり所の違いのため、「一目惚れ」現象は男に早めに生起し易く、女に遅めに起き易い。外面に目が行くのは時間を要さないし、内面にまで達するのは時間がかかるからである。この現象にはもちろん、例外があるが、おおよそ、見初めるのは男で、見初められるのは女であろう。恋愛現象は男が先導し、女がそれに応じ、相手を観察し、中身を味わって、質が良ければ迎合するという過程を踏むであろう。

美しい女に絞られるとなると、「私、入れて貰えるのかしら」と首を傾げる女がいるかもしれないが、そこは安心されたし。何が「美」であるかは、個人の好みに任されるからである。自分は太り気味で、オカメだと心配顔の女でも、男によっては、だからこそ、いいんだと言い張る男も希に居るからである。タデ食う虫も好き好きというではないか。やせ気味の女より太り気味の女がいいんだと、主張する男も、きっと広い世の中にはいるはずで、そういう奇抜な男に回り逢えばいいのである。繰り返すが、何が美であるかは男の好み次第である。

ただし、この言い方は慰めであって、現実には、厳しい。何が「美」に該当するかはおおよそ、決まっている。細身で、小柄で、目がぱっちり開いていて、鼻が高く、肉感的な唇などを備えた人が美しい女の部類に入るであろう。参考までに、どのような体形また容姿の女が選考基準にされるのかを、英字新聞の meeting point で調べたところ、次の形容詞が拾えた。

slim, fit, lean, petite, cute, pretty, slender, svelt, ..

男が美しい女に見惚れるのは、言い換えると、その特性に触発されて、性的な感覚が働くからである。男は、動物的な側面があり、女を性の対象として捕らえやすい。美人、即、sexy な女と見る傾向にある。この傾向は特に恋愛の初期に認められる。

一方、女が男に望む体型は、同新聞によると、次に挙げる形容詞が示す通りである。前述したように、「ハンサム」であるとか「好男子」とかいった単純なものではなく、「あらっぼさ」とか「たくましさ」をも擁する複合的な素養である。「頼り甲斐のある」男が求められる。

rugged, solid, athletic, healthy, muscular, strong, viril, robust, ..

女の求める上記の形容詞は、男の求める形容詞とは、内容的に異なっていることに注目したい。女の狙いは内面的な特性にもかなり食い込んでいる。男にとって女はただ美しければいいが、女にとって男は信頼できて、頼れる人でなければならない。

女にとって、外見と内面は、どちらも兼ね備えていることに越したことはないが、どちらか一つとなると、後者に重きがおかれる。この傾きから、男は多少不細工で醜くても、内面が優れていれば、女に好意を寄せられる。この好みから、「美女と野獣」の組み合わせも可能になる。そういえば、身辺には、あんなに綺麗な奥さんがあんなに醜い、ゴリラみたいな男とよくも一緒になっていると驚嘆させられる組み合わせが散見される。この逆の、つまり夫が美男子で妻が醜いという組み合わせは希少である。

醜い夫と美人妻の結合がしばしば見られ、醜い妻と好男子の夫の組み合わせが希なのは、上に指摘した、女の複合的な選り好みによる。

男女の相手に対する選考基準が上記の通り異なっているという事実を是認するのはいいとして、

つまり男にとって「美しい」女が、そして一方、女にとって「信頼のおける」男が選定されるとして、これで、以降未長く、夫婦関係が維持して行くかとなるとどうも保障の限りではない。一応、選考基準には乗っ取っても、その後、好み通りの相手ではないことが暴露されることが、つまり期待外れの男また女であると発覚されることが起こりうる。このとき、誤解が明白になり、衝突が起こり、火花が飛び散る。誤解の図面を覗いてみよう。

火花の原因は好みの固執にある。美しい女でなければならぬという思い込みがあるから、そして、交際してみてそうだと判定し、これが現実に裏切られることから、即ち「そんなはずではなかった」という葛藤が原因でいざこざが起きるのである。

これを解消するには、好みの指向性を緩和したら済む。「俺の好みは美しい女だ」という自縛から開放されると、気が楽になり、火花が弱くなる。

自分の判定が裏切られ易い例に、深夜営業のスナックの女の子が挙げられよう。うす暗いところで厚化粧していると、女は誰だって「綺麗に」見えるものである。昼間でもずるい女は長い髪の毛を變形させて美しく見せようと工夫するし、太い脚でも厚底靴とかミニ・スカートをはいて、ほっそり見せようと工作するものである。このように、実際にはそうでないが、美しくみせようと偽作する女は一種のペテン士・詐欺士であるが、これに騙される男も悪い。

同類の期待外れは、加齢による場合もある。女は、若いときは、精気に満ちあふれているため、一応誰でも可愛く見え、男も願ったり、かなったりの女だと思い込むが、時が経つにつれ、皺が増すにつれ、化粧を省くにつれ、美から醜に姿を変えていくものである。

いずれにしろ、「美人」であることという好みに拘わると、期待外れのショック感に陥りやすい。陥らないようにするには、美への好みに拘わらなければいいのである。期待するから、期待外れになるのだ。外れて、身辺に「そんなはずではなかった」とわめき散らさないようにするには、女の美というものは、恋愛の初期の段階では、固定しているが、その後、必然的に變形の運命をたどるのだとあきらめるのが肝心だ。あきらめると、怒りを訴えなくて済む。女は、客観的に査定して、よく變形するものだ。この事実を頭に入れて、交際を続けると気が楽になり、誤解による火花も散らなくなる。

女の外観が變形しやすいという現実肯定として、女が男に求める内面も、つまり「信頼感」も正直にいつて変動しやすいものである。結婚当初は、時間通り家に帰ってくるし、夜遊びはしないし、信頼がおけても、数年もたつと、これまでの品行方正振りが次第に崩れてくるものである。疑わしい残業の回数が増えてくるし、いろいろ隠し事が多くなりやすい。結婚式のとき、「俺の愛する女は君だけだ」と誓ってくれたし、そのことを信頼しきっていても、男の内面のうつろい易さのため、期待外れに向かうものである。

信頼感が希薄になったとき、女は裏切られたという気持ちになり、ここで、火花が飛び散る。夫婦喧嘩が勃発する。爆発を未然に防ぐには、初手から、信頼感を置かないに限る。夫（男）というものは秋の空のように変化するものであるとあきらめるのだ。更に言うと、「信頼に値する」という内面の特性を男にしつこく期待しないことである。あきらめると、現実肯定になり、夫婦関係は

丸く納まるものだ。

7 テキストに見る違い

ここで視点を変え、テキストに見る男女の交友関係を覗いてみよう。親密か疎遠か、違いが少ないか、多いかといったことを観察してみよう。男女の違いが多ければ、平行して交友関係は薄いと、少なければ、その分だけ濃いと見られ、この相関関係から、友愛を願い、求めるのであれば、違いを少なくすれば、差し当たりの目標は達成されることになる。達成を容易にするためにも、違いを明確に捕獲しておく必要がある。

テキストとして、私が最近興味深く読んだ、渡辺淳一の小説「幻覚」(2004、中央公論新社)を引き合いにだそう。当小説は、看護師の「北風くん」(北向健吾 31)の語りで進行していく。ここで注目するのは、彼と彼が恋心を寄せている二人の独身女性——「氷見子先生」(5歳年上の院長)と「中川涼子」(3歳年下の同僚)——との恋の鞘当てである。

外面に現れた交友関係から判断すると、氷見子先生との仲がより密接であり、この点で共有感が多いと言える。先生に対する憧れの気持ちがあつぽく語られる。一部拝借しよう。

「先生は、目鼻立ちが整っているうえに、すらりとしてスタイルもよく、それだけに柔和というよりシャープで、容易に近づき難い、冷ややかさを秘めているように見える」

「僕の部屋、壁に氷見子先生の写真が飾ってある。
この写真をみながら、朝は「おはよう」といい、夜は「お休みなさい」と声をかけるのが慣わしになっていた」

「僕は先生のなかに、……母性のようなものを感じて見とれていると」

これらの恋心の高まりは、男の女に対する、崇拜にも似た「一体化」であり、本論で説いている「違い」のゼロ回帰に等しいものである。先生とのデートも彼の熱心な働き掛けにより実現する。食事を共にしたり、夜桜を一緒に鑑賞したりする。究極のベッド・インも3回(初めは不発)実現する。更に先生から、一介の看護師でありながら医師と同等の待遇を与えられたりする。

北風くんは熱い思いが実行に移される度に、先生との一体感を高め、間に溝を、つまり本論で言う「違い」を意識しなくなる。ただし、違いがないと判断するのはお人好しの北風くんの方だけである。先生は彼のことを端からなんとも思っていない。

そこで、先生との交友は、北風くんのワン・サイド・ゲームということで、間に違いがなく、円滑に、密接に運んでいるといえるであろう。

一方、同僚の涼子との交友であるが、北向の方は前向きで、氷見子先生に憧れながらも、交際を続けようと折をみて働きかける。先生を崇拜するのと同時に、涼子にも好意を寄せるといふ、男によくある、両刀使いである。彼女の「気楽に話しかけてくれるところが気に入っていた」し、「体の関係もあった」ことだし、続行したい気持ちはあるのだが、涼子の方は一年前から、回避的になっている。「僕に冷たくなり、求めても許してくれなく」なった。女が男を突き放すようになったのである。「僕が先生が好きになったことを知って」避けるようになったのかと北向は思い込むが、そうでもないようである。

一読者の感じからすると、嫉妬心から女が男に背を向けるようになったのではないように思われる。文字通り、男に対して、見解の相違が意識されてきたことが、愛の希薄化となって現れているのだと思われる。嫉妬心が原因であれば、あつっぱい口喧嘩が起こってもいいはずであるが、これが認められないのである。

北向の愛情あふれる抗議に対して、涼子は常に冷淡である。

「涼子の声は落ちついている」

「やけに冷静で理屈っぽい」

「しらけたいいかた」

対話に際して、一方が興奮気味で、もう一方が冷静沉着であるということは、両者の間に、見解の相違が決定的であることを、物語るであろう。男女の「違い」は、涼子が北向のやること、なすことに逐一反対するに及んで、更に明確になる。

患者の治療の仕方について批判したり、カウンセリングの役職に昇格するというのに足を引っ張ったり、最終的に、別の病院に去って行くといったことで、男女の違いが固定する。

結局、北向と氷見子また涼子との恋愛関係は挫折するのであるが、いずれにしろ、双方の「違い」が基点になっていることが了解されれば可としたい。違いが基で、交友あるいは対話が好転したり、悪転したりするのであれば、逆に、良い結果を産みだしければ、違いを無くすように、悪い結果にしたいのであれば、違いを残しておけば、済むことである。したがって、テキストによる上の知見は、これまでの論及に吸収されるであろう。

ま と め

不和・衝突・口論などの発火点になる性差は更にもっと加えられるが、一応、この辺で区きりとしよう。これまでどういった性差を指摘したかは、2節以下の小見出しで示した通りである。気質的に男がぞんざいであるのに対して、女は丁寧である、感情的に女が高じやすいのに対して、男は

冷静である、愛情の維持に関して女が永続的であるのに対して男は断続的である、……といった具合に違いを提示した。示し方が大雑把過ぎて、また抽象的で、見出しそのものは肯定も、否定もできかねるもので、なんとも締まりのない言及であったが、私としては、入口は広く、出口は狭く工作したつもりである。

論及は出来るだけ先細りになるように、実のあるものになるように心掛けたつもりであるが、成果は読者に委ねられる。当論の情報が役にたったと思われれば、成功したことになるし、大雑把で絞り込みようがないと頭を傾げられるようであれば、失敗したことになる。私の本意は前者に寄っていたことにあった。

論及の大筋を確認しておこう。性差の対象であるが、先ず根元的に備わっているもの（身体部分）は人為的にどうしようもないと言うことで選外にした。例えば生殖器の違いは論点の「不和」の原因にならないからである。それから「雇用機会均等法」とか「給与の格差」といったことは、その原因にはなるが、政治的な色彩が強いということで、これも選外にした。ここでは、男と女の愛情の持ち様とか習性の違いを対象にした。

論点の対象が絞られると、違いの存在を鮮明に特定化した。事例を添えながら、具体的な情報の伝達になるように努めた。男女の不和の原因を突き止め、それに対して、歩み寄りの可能性を探った。例えば、ぞんざいな命令口調の呼びかけは、男から男へに対してであれば、好感をもって受入れられるが、女へに対してであれば、そうでない場合、ぞんざいな言い方を丁寧な懇願口調に切り替える、すなわち歩み寄る姿勢が望まれることが確定してくる。当論がそこに収斂していけば、幸いである。

参考文献

- Allan & Barbara 2002: Why Men Lie and Women Cry, Orion.
Allan & Barbara 2001: Why Men don't Listen and Women can't Read Maps, Orion.
Gray, J 1992: Men are from Mars, Women are from Venis, Harper, Collins.
伊東 明 2004: 女は男のどこを誤解するのか、王様文庫。
Ruhle, C 1978: "Prerequisites for a Linguistic Description of Coreferences," Language Sciences 25.